

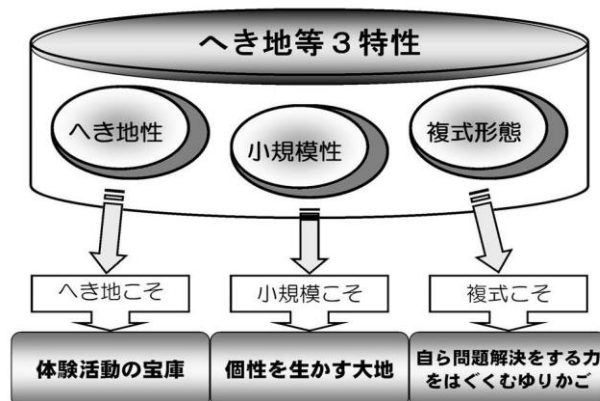
第12章 へき地・複式教育

1 へき地等学校及び複式学級の定義

へき地学校…交通条件及び自然的、経済的、文化的諸条件に恵まれない山間地、離島その他の地域に所在する公立の小学校、中学校及び義務教育学校(へき地教育振興法第2条)
 複式学級…2つの学年の児童の合計が16人以下(第1学年を含む場合は8人以下)の場合に、同一学級に2個学年を収容して編制する学級(栃木県学級編制基準)

2 へき地等学校及び複式学級の3つの特性

へき地等学校及び複式学級の教育を考える場合、へき地性、小規模性、複式形態の3つの特性に着目して、教育効果の向上を図る手立てを構築していくことが望まれます。



3 複式教育の教育課程上の配慮事項

(1) 複式学級の利点を生かす計画の作成

ア 一人一人に応じたきめ細かな指導を通して、基礎・基本の確実な定着を図ると

ともに、自学自習の経験を生かし、自ら学び考える力の育成を図る指導計画を作成します。

イ 上学年と下学年の関わりを通して、学年を越えて学び合う態度を育てるよう配慮します。

(2) 学年別指導の年間指導計画・単元指導計画作成と授業の準備

ア 教科によっては、学年の年間授業時数が異なるため、2個学年の単元の目標を確かめ、単元配列を行うとともに、評価規準や観点、評価方法を確認し、計画を調整します。

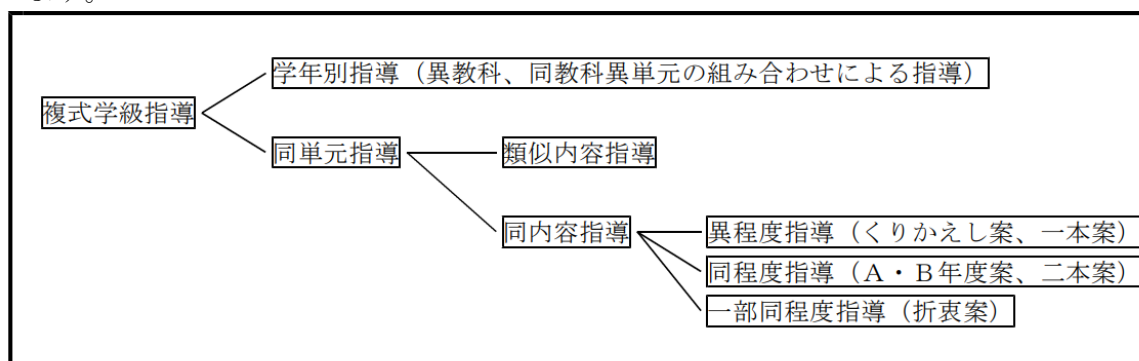
イ 授業時数の少ない学年は、授業時数の多い学年に合わせて、補充学習として授業時数を増やすことなども可能です。

ウ 学習指導要領では、目標や内容を2つの学年にまとめた教科等があるため、発達の段階を考慮するとともに、指導の漏れがないように十分に留意して年間指導計画を作成します。道徳科などは、学級編制によりA年度・B年度年間指導計画を作成することができるか十分吟味し、指導すべき内容項目・教材などの配置について検討することが重要です。学級編制が変則的(2・3年/4・5年の複式)な場合には特に注意することが必要です。

(3) 指導過程の工夫及び学び方の系統の明確化

ア 複式学級の学習指導過程は、単式学級の学習指導過程と本質は同じですが、2つの学年の児童を同時に指導しなければならないため、指導内容の組合せ・学習過程の設定順序を考慮します。(→学習過程の「ずらし」、教師が直接指導を行うための「わたり」の工夫)

イ 教師が教え込む授業ではなく、体験的な活動を取り入れたり学習の進行に必要な学び方を明確にしたりして、間接指導における自力解決の能力を高め、自ら問題を解決する力を養います。



4 複式学級経営上の留意点

(1) 複式学級の個人差や人間関係に応じた指導の推進

- ア 個の実態を正確に分析し、その児童の状況に応じた指導の手立て、支援を構想する。
- イ 児童相互の人間関係について、馴れ合い等が生じないよう場をわきまえた適切な対応ができるようにするとともに、互いに切磋琢磨できる環境づくりを行う。
- ウ 一人一役を基本として、全員に活動の場を保障する。

(2) 思考を広げるための教師の意図的な関わり

- ア 話し合い活動の深まりをもたせるため、教師が意図的に話し合い活動に参加し、話し合いを深めるためのポイントを投げかけたり、不足の点を補ったりする。
- イ 発達の段階に応じた発表の仕方、発表態度、聞く態度の育成に努め、多様な発表の場面を設定する。(ペア・3人以上のグループ・学級全体・学校全体など)

(3) 教師の「待ちの姿勢」の意識化

- ア 人数が少ないので、児童の作業の遅れなどが目立つ場合もあるが、必要以上に援助の手を差し伸べることをせず、指導事項を精選し、取り組む時間を十分に保障する。
- イ 児童の頑張りを認め、称賛する場面を多くし、自尊感情を高められるようにする。

(4) 一人学び・共学びの充実

- ア 自分たちで学習を進めることができる力(一人学び)や、人間関係の結び付きの強さを生かし学習を進めることができる力(共学び)の育成により、主体的に学ぶ児童を育成する。
- イ 直接指導・間接指導時の学習上のルールを徹底し、学習マニュアルなどを活用して、ガイド学習・リーダー学習を充実させる。

(5) 主体的な学習習慣・学習環境づくりの工夫

- ア 授業の中で、発達の段階に応じた「読む・書く・話す」という活動を積極的に取り入れ、基本的な学習習慣が身に付くように学習内容の構成を工夫する。
- イ 児童が常に新しい目標を見付け、取り組もうとする学習の習慣化につながる活動を取り入れる。(朝の活動・業間・帰りの学習などに設定する〇〇タイムなどで読書、計算、漢字学習、音読、名文・詩の暗唱・英語学習などの活動を行う等)

5 複式学級で授業をする上での留意点

(1) 学級担任と複式解消教員との連携

教頭や教務主任、各市町において配置されている複式解消教員が複式学級に入り、単式学級の形態にして国語や算数などの授業を実施している場合があります。また、学年別指導でチーム・ティーチングを行う場合、担任が中心となって両学年に関わる指導を行い、複式解消教員はその支援をします。そうした場合、担任は、間接指導中に指導や評価を複式解消教員に委ねてしまいがちになりますが、一方の学年を複式解消教員に全面的に委ねて指導や評価を行うことがあってはなりません。担任は一人であるということを念頭に置き、責任ある指導・評価を行うことが求められます。例えば、単元ごとに担当する学年を変えるといった工夫をして、担任は複式解消教員から得た情報を生かしながら、児童一人一人に応じたきめ細かな指導を展開することが重要です。

(2) 評価の在り方

単式学級の形態で授業を行っていても、評価を行うのは担任です。複式解消教員が行った評価は、補助資料として使用します。したがって、間接指導時は、見取る場面を明確にした上で評価方法を工夫することが必要となります。そのためにも、担任と複式解消教員との間で児童の実態を十分に把握し、どの場面で何を見取るのかを事前に計画しておくことが重要です。